

【寄稿】

思い出コミュニケーションと家族写真

ネットワーク情報学部教授・山下 清美

記憶の共有で人間関係を再確認

個人的な領域における経験の記憶、すなわち「思い出」には、単にそれを懐かしむだけにとどまらず、人々の人生を豊かにする上で有用なさまざまな機能(これを総称して「思い出コミュニケーション」と呼ぶ)がある。思い出を振り返ることで、人は自分という存在を確認するとともに、過去・現在・未来の自己を統合することができる。思い出を人に語る(聞いてもらう)ことによって、自分が他者に認められたと感じることができる。また、家族や友人と思い出を共有し語り合うことで、身近な人間関係を再確認できる。思い出を人に語ることは、人と親しくなるきっかけになりうる。

人生振り返るよい機会に

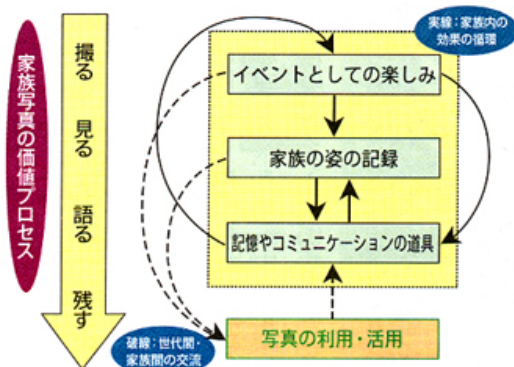
「思い出コミュニケーション」は外的な手がかり(例えば、日記、手紙、写真、土産物など)によって活性化されることが多い。中でも写真は具体的な情報を大量に含むため、もっとも強力な手がかりである。ここ数年、「大切な写真を5枚選んで、なぜその写真が大切なのか理由を書く」ことを「心理学」の夏期レポート課題にしているのだが、最初はとまどう学生が多いものの、いざ取り組んでみると自分の人生を振り返るよい機会になった、という感想を書いている学生が少なくない。1枚1枚の写真をじっくり見ているうちに忘れていた記憶が鮮明によみがえるだけでなく、課題のためにアルバムを見ていたら、家族が寄ってきて思いがけず会話がはずんだという学生もいる。

こうした写真の思い出コミュニケーションの効果を実感させられるものに、写真館で撮る家族写真がある。写真館のグループも最近、家族写真に注目し、展示会を行っている＝写真・下。

筆者は富士フィルムイメージング株式会社との共同研究で、写真館で家族写真を撮った経験のある家族20組(うち9組は夫婦または子どもを含む複数で参加)にインタビューを行った。協力者には、写真館で撮影した家族写真と、個人で撮影した家族が写っているスナップ写真を持参してもらい、約30項目の質問をした。インタビューの全発言をテキストに起こし、代表的な4組(インタビューが単独か複数か、家族写真のタイプが節物(ふしもの)か毎年か、の組み合わせによる4群から1組ずつ選択)の発言について、グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考にして詳細な質的分析を行った。また全20組について、各質問項目に直接回答した部分を整理して分析の補足とした。分析では、協力者の各発言単位について内容を要約したラベル付けを行い、同一や類似のラベルの付いた発言を集め、そこから家族写真の意味や価値に関連すると思われるものを抽出してカテゴリとした。さらにカテゴリを相互に比較して、類似の機能を持つと考えられるものを集め大カテゴリを作成した。その結果、写真館で撮る家族写真の価値は次の四つ



山下教授(前列中央)の家族写真



▲ インタビューの質的分析から得られた、家族写真の価値のプロセス



若手写真館経営者のグループPGC(パイオニア・グリーン・サークル)が東京で開催した「家族の絆」展から

の大カテゴリに集約された。

- ① イベントとしての楽しみ……家族のイベントの際にその記念として家族写真を撮る、さらに家族写真を撮ること自体がイベントとなり、演出を楽しむ。わざわざ都合をつけて写真を撮りに行く面倒さが、逆にイベントとしての記憶に残りやすさにつながる。
- ② 家族の姿の記録……1枚の写真の中に家族の姿が凝縮され、貴重な瞬間が記録に残る。家族の状態（幸せ、苦勞）や家族の変化や成長が目に見えてわかる。プロならではの技能や熟練に支えられた写真の出来栄の良さが、価値を一層高める。
- ③ 記憶やコミュニケーションの道具……家族が共有する出来事の記憶を引き出したり、家族のコミュニケーションを生みだしたりする道具になる。保存のしかたは家族によってまちまちだが、一緒に見る機会があると話題が盛り上がる点は共通している。
- ④ 写真の利用・活用……きちんとした写真なので、親世代に贈るなど家族外に向けた利用ができる。お祝いのお礼や年賀状など、世代間や家族間の交流に使われる。

世代間交流で 価値を伝承

家族写真を継続して撮っている家族は、世代間の交流によってその価値を伝承したり、家族内のコミュニケーションによって価値を循環的に高めたりする傾向が見られる。しかもこれは家族写真を撮る、という行為に限定されるものではなく、一緒に何かをする、そのために家族が協力をする、という家族内の働きかけにつながっているようである。その結果家族は共同活動を通して、家族というものの意味や価値を親世代から子世代に伝達していく。家族のあり方が多様化し混迷している時代にあって、家族が共通の体験を持ち、記憶を共有することの大切さに、この研究を通して改めて気づかされた。実は筆者自身も、この研究の後にはじめて、家族写真を撮ったのである。

経営学部

学部をより良くするために！ 本音で語り合う

第2回学生・教員懇談会

「学部をより良くするために」—経営学部(魚田勝臣学部長)では、学生が求めるものを反映させようと「第2回学生・教員懇談会」を11月15日、生田キャンパスで開いた。

事前にレポートを提出した学生10人と同学部OGの院生1人が参加。進行は嶺井正也教授が務めた。

「NPOに興味があり、関連の授業を受けたい」との要望に対しては、「教員は専門以外にも広い活動範囲をもっている。まずは相談をしてみてもどうか」と坂口幸雄助教授からアドバイスが。「前期は基礎、後期は実践といったメリハリのある授業を」との要望には、大曾根匡カリキュラム委員長が、「平成19年度から導入する新カリキュラムでは、多くの科目が Semester制となる」と回答した。企業研修(インターンシップ)を体験した学生からの、「企業の方の前でのプレゼンはとても良い経験だった。研修参加者だけでなく、多くの学生に公開してはどうか」との提案には、「次年度の履修の参考にもなるので、ぜひ実現させたい」との前向きな回答がなされた。体育会所属の学生や留学生など、それぞれの立場の悩みに対して、教員から体験を交えた親身なアドバイスがあった。

予定時間をオーバーするほど内容の濃いものとなり、嶺井教授が「ゼミナール選択に役立つよう、系列シンポジウムや、授業評価を全授業に実施するなど、学生の満足度を高める努力を今後も続けていく」と締めくくった。

※懇談会の様子は学部ホームページに掲載されています。



それぞれの立場で学部への関心事と希望を述べた



肇に魚田学部長が学部の現状と将来を語った

高大連携

横浜桜陽高校の研究授業に協力

文学部・田邊祐司教授

高大連携協定校の横浜桜陽高校(西村宗一郎校長)で11月30日に行われた英語科の研究授業に田邊祐司文学部教授が協力。ゼミ生で教員志望の石黒豊さん(4年)、Y.Uさん(3年)も参加した。

授業者の阿部大志、松尾好洋両教諭は事前に授業をビデオ録画し、田邊教授から改善点のアドバイスを受け授業を実施。ゼミ生はペアワークの相手を務めるなど、授業の補助にあたった。

研究授業後には、岡田善明教頭をはじめ英語科教員全員と実際に授業を受けた生徒の代表が授業の感想などを話し合った。

生徒から「きれいな発音に驚きました。英語力アップの秘訣は？」と尋ねられた石黒さんは「歯みがきと同じように英語学習を習慣化して、楽しみながら実力をつけてみては」とアドバイス。さらに2年前はTOEICが450点だったのが860点にのび、また英検準1級にもパスした自らの経験から、「互いに励ましあえる仲間を見つけては」と、上達の秘訣を披露した。

生徒たちは「今回のように授業について生徒の意見を聞いてくれる場があり、うれしい。大学生の英語学習法を教えてもらったので、さっそく試してみたい」と話した。

田邊教授はITを活用した学習法などのアドバイスの後、「授業は『学びの共同体』だ。生徒と教師の共通理解があって『いかに学ぶか。なぜ学ぶか』という答えが出てくる」と結んだ。ゼミ生2人は「授業に出させていただき、ますます教員志望が高まりました」と話した。

同校は、03年4月に全国初のフレキシブルスクール(単位制・全日制・普通科)として誕生。進路に合わせた多彩な選択科目が展開されている。



懇談会で英語学習のポイントを話す田邊教授(奥)。右はUさん



「ペアワーク」の相手を務める石黒さん